

## シンポジウムを振り返って —アーカイブズの効用とアーキビストの養成

早稲田大学 平野 健一郎



もう30年くらい前のことになるが、筆者は学部3、4年生向けの「国際関係史演習」で、当時としては面白い思いつきの共同作業を学生たちとやった。満州事変勃発と同時に、満州の現地と東京の外務省や参謀本部、日本の外務省本省と出先大使館、日本の外務省と各国政府の間などで交わされ始めた電信など、関係するすべての出来事を、時差を考慮した発生順に、大きな模造紙に次々と書き込んだのである。その作業自体、かなりの時間と労力、それに推論を必要とし、学生にも私にもフレッシュな勉強になったが、表がほぼ完成すると、多数の関係者の間で一体どういうやりとりが進んで行き、一つの歴史が作られて行ったのかを議論し、理解しようとしたのは、さらに刺激に満ちた国際関係と歴史の学習となった。気のせいだが、この年のゼミから卒業して行った人々の中には、優秀な研究者や実務家に育った人が例年以上に多かったように思う。

アジア歴史資料センター5周年記念シンポジウムのパネル・ディスカッションでの最後の質問に、センター長の石井米雄先生がお答えになったお話と、それに触発されて、私が「まとめ」で述べた感想の一つは、デジタル・アーカイブズの具体的な効用に触れたものであった。すなわち、デジタル・アーカイブズは複数のアーカイブズから得られる複数の歴史資料を同時に読み比べることを容易にしている。30年前に、何人もの学生が何ヶ月もかけて手作業でやった作業を、一人ででも、はるかに少ない時間と労力で成し遂げることができるようになったのである。アジ歴のホームページ上で見られるインターネット特別展「公文書に見る日米交渉～開戦への経緯～」の中にある「詳細年表」は、(一人の力で作られたものではないが)まさにそのよい参考例であろう。その作業の成果にしたがって資料を次々に読んで行くと、歴史の展開の襞を当事者の次元で、しかも当事者よりもはるかに広い視野で追体験すること(「その時歴史が変わった!」)ができる。どこでコミュニケーションが不調に陥り、どこで誤解が起こり、どうやってその誤解が拡大して行ったかを理解することができる。細谷千博先生がいわれた「ボタンのかけ違い」のストーリーを追うことができ、分析することができる。そのように歴史資料を読んでいくことの中からは、私が個人的な感想として述べた「国と国とに分かれて、同時代の歴史を生きる人間の営みの『哀しさ』」というようなものへの感覚を国際的に共有していける可能性も見えてくるので

はないかと思うのである。

デジタル・アーカイブズの援けを借りれば、このような作業と歴史の追体験が容易にできるようになったのである。その点では、歴史研究者と歴史愛好家は同じである。デジタル・アーカイブズは歴史愛好家を歴史研究者に近づける、といえるかもしれない。しかし、もちろん、歴史研究者はデジタル・アーカイブズが提供する文書だけで歴史を語るわけではない。当該の文書の歴史の意味を正當に捉まえるには、それを広い歴史的背景と広い社会的背景の中に位置づける必要があることはいうまでもない。

歴史研究者による歴史研究を容易にし、歴史に関心を持つ一般の人々による歴史追体験を可能にする文献を集めて、アーカイブズを構築するには、歴史資料を扱う専門家、アーキビストの力が必要である。30年前の大学ゼミにおける年表・日表の作成にしても、アジ歴ホームページ上の「詳細年表」の製作にしても、そもそもアーキビストが資料を集め、整理して、利用可能にしてくれていなければ、不可能なことである。事実、アジ歴はデジタル・アーカイブズで、ヴァーチャルな資料館であるといわれながらも、そこには資料整理を行う作業室があり、毎日、常時6～7人の大学院生が詰めて、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所図書館から提供される文書を一つ一つ丹念に読み、分類し、キーワードを拾い、「先頭300文字」をコンピューターに打ち込む、地道な作業を倦まず弛まずに続けている。この仕事がなければ、われわれはコンピューターの画面に歴史資料を呼び出すことができず、そもそもアジ歴も存在しない。

デジタル・アーカイブズとしてのアジ歴がコンピューターの画面上に提供する文献の真正性（オーセンティシティ）を保障するのは、彼ら大学院生の地道な作業である。彼らが熱心に、かつ真剣にその仕事に向かっている姿を見ると、胸を突かれるような思いに打たれる。確かに、歴史資料の真正性は、コピーではなく、本物の資料によって担保される。「ほんもの」を直に触って、その紙質を感じ、墨跡を辿り、はんこの色や捺され方まで確かめなければならない。真正の歴史研究者なら、少なくとも最重要とみなす資料については、やがてそこまでたどり着くであろう。そういうものとして、オリジナルな資料は保存されなければならない。しかし、そうした資料を発見し、整理し、保管し、さらに歴史研究者や歴史愛好家の利用に供するのはアーキビストである。信頼できるアーキビストなしには、歴史資料の真正性を云々することもできない。

ところが、日本にはアーキビストはほとんどいない。アーキビストが尊敬に値する専門職として認知されていない。文書社会でありながら、文書を扱う専門職を持たない先進国社会は日本だけではなからうか。そう考えると、アジ歴の資料整理室でアルバイトとして作業している院生諸君は、歴史研究者の卵であり、アーキビスト候補者である。いな、指導者不在の中、仲間同士助け合い、励まし合って、アーキビストと



しての自己修練を積んでおり、すでに立派なアーキビストになっている人もいるに違いない。とすれば、アジ歴は期せずして日本最初のアーキビスト養成所になっているのかもしれない。そこからアーキビストの正当な認知が始まるならば、アジ歴は真にオーセンティックなアーカイブズとして国際的にも認知されることになるのではないだろうか。最終的に、アーキビストの養成こそがアーカイブズの効用を高めるものであると思われるのである。

---

平野 健一郎 (ひらの けんいちろう) : 専門は国際関係論、国際関係史、国際文化論。著書は『国際文化論』(東京大学出版会, 2000年)、『国際文化論』(東京大学出版会, 2000年)ほか